

図書館展示9月 2004

Ludwig van Beethoven

1770-1827

# ベートーヴェンの 編曲作品

作品のいっそうの普及と収益のために

企画・構成 音楽研究所ベートーヴェン研究部門

期間 2004.9.6 - 10.1

場所 図書館ブラウジングルーム



## ベートーヴェンの編曲作品

ベートーヴェンの時代は、オリジナルの楽曲をさまざまな編成に移して演奏することが、ごく普通に行われていました。なぜ編曲が必要とされたか、編曲とはなにか、オリジナル作品とはなにか。展示では、主に、ベートーヴェンの存命中に出版された編曲譜をごらんいただきながら、このことを考えてまいります。

企画・構成 音楽研究所 ベートーヴェン研究部門



### Contents

ベートーヴェンの編曲楽譜	土田英三郎	2
ベートーヴェンの民謡編曲	藤本一子	10
ギター伴奏の編曲について	藤本一子	15
展示パネル紹介	加藤拓未	18
展示楽譜紹介	長谷川由美子	23



## ベートーヴェンの編曲楽譜

土田英三郎

国立音楽大学図書館が所蔵するベートーヴェン初期印刷譜コレクションは、この作曲家の生前や没後に出版された19世紀印刷譜の貴重な集成です。ここには初版楽譜やその増刷、後続版などにまじって、多数の編曲譜が含まれています。

編曲が多い作品として、例えば弦と管のための七重奏曲 作品20(1799年作曲)があります。作曲者の生前に大変な人気を博したヒット曲で、1802年に初版が出た直後から、管楽十一重奏からピアノ独奏にいたるまで、様々な編成でも出版されています。1830年代までに、少なくとも13種の編成、編曲者の違いを考慮すると17種もの編曲版があります。これには、作曲者自身によるピアノ三重奏版 作品38の2種も含まれます。1860年代まで延長するとさらにもう1種の編成、4種の編曲版が知られています(リストによるピアノ連弾譜を含む)。同じ編曲でも増刷や再版、他社による新版が多数出ているので、エディションの延べ点数は大変な数になります。以上に加えて、手稿譜のまま印刷されなかった初期の編曲が4点あります。

なぜ、こんなに編曲譜があるのでしょうか？ 19世紀では、作品の普及に編曲が重要な役割をはたしていたからです。

### 編曲譜の役割

録音や放送がない時代には、音楽作品を楽しむ機会はなまの演奏に限られていました。ベートーヴェン(1770～1827)の頃は、演奏会ですら今日とは比べものにならないほど少なく、しかも大きな編成の曲はめったに聴けるものではありませんでした。演奏家や批評家が総譜を見る習慣もまだ確立されておらず、出版譜の多くはパート譜でしたから、そうした楽譜から曲の全体像をつかむことも難しい。こうした時代にあっては、交響曲などの管弦楽、オペラなどの大がかりな声楽作品を知る手っ取り早い手段が、鍵盤楽器や室内楽編成に直された編曲譜でした。編曲譜を通して、家庭やアマチュアの集いでもいろいろな曲に親しむことができたわけです。交響曲などのピアノ独奏譜や連弾譜を作成し販売する習慣は20世紀に入っても続いています(今日でも声楽曲のピアノ・ヴォーカル・スコアは練習用に不可欠のもので、バロック時代以前の音楽、あるいはブラス・バンドやポピュラー音楽のように、編曲ものがレパートリーのかなりの部分を占めるジャンルもあります。しかし、これらはやや性格を異にするとと言えるでしょう)。

売り手の側から見れば、19世紀の編曲は楽譜出版上の戦略と密接に関わっていました。一つの作品を様々な編成で販売することは、作品そのものの普及に役立つばかりでなく、作曲者と出版業者の双方にとって、新しい販路の開拓、比較的手軽な手段による商品の増加、ひいては増収の可能性を意味したからです。

さらに19世紀の前半は、そもそも音楽作品を一つの完結した形態として捉え、楽譜を侵すべからざる神聖なテキストと考える近代的な意識が、まだ希薄な時代でもありました。一つの作品をいろいろな編成で楽しむことが当然のこととして考えられてもいたのです。そういうわけで、編曲ものが音楽マーケットの重要な部分を形成していたことは少しも不思議ではありません。

ん。当時の人々は、オリジナルの作品よりも、むしろこうした編曲に接する機会の方が多かったはずで。

1800 年前後は近代的なビジネスとしての楽譜出版制度が確立されつつあった時期で、ベートーヴェンもその制度を積極的に利用しました。編曲もの場合も例外ではありません。キンスキー／ハルムによるベートーヴェン作品目録(1955)では、初版や後続版の情報に加えて、編曲版の欄が独立して設けられています。これは作曲家作品目録としては珍しいことで、ベートーヴェン編曲の著しい種類と量を物語っています。この目録ではかなり詳細な情報が提供されていますが、それでもおそらく全体の一部にすぎません。本学所蔵の楽譜で、そこに記載されていないもののがかなりあるからです。

### ベートーヴェンの編曲観

ベートーヴェン作品の編曲譜がこれほど目立っているにもかかわらず、それに関する研究はあまり行われていません。ベートーヴェンの音楽と言えば、オリジナリティとかオーセンティシティ(正統性)の象徴。それに変な手を加えるのはもってのほか、というのが一般的なイメージでしょう。ベートーヴェン自身、編曲というものの自体にあまり興味がなかった、というのが通説になっていました。

ところが、彼の書簡や伝記資料を綿密に調査してみると、ベートーヴェンは編曲に関してかなり肯定的な見解をもっていて、出版業者に対してむしろ積極的に編曲を提案していたことがわかります。例えば、先にあげた七重奏曲 作品 20 の場合。この作品の原曲初版はヴィーンのフランツ・アントン・ホフマイスターが経営するホフマイスター商会とライプツィヒの姉妹店から出版されています。ホフマイスターは当時有名な作曲家・楽譜出版業者で、友人モーツァルトの(ホフマイスター四重奏曲)の出版や、バッハ、ハイドン、モーツァルトの全集版の計画、それにライプツィヒ店がやがてベーターズ社となったことなどでもよく知られています(近年、ベートーヴェンにフリーメイソンの思想を紹介した一人としても注目されています)。

ベートーヴェンは 1800 年 12 月 15 日、交際が始まったばかりのホフマイスターに対して、「もっと頻繁に演奏されるために」、作品 20 を弦楽七重奏に編曲できる可能性を手紙で伝えています。つまり原曲が出版されるよりも前のことです。翌年の 1 月 15 日頃には、「作品のいっそうの普及と収益のために」、ピアノ用に編曲できることを示唆しています。次に今度はホフマイスターの側から、モーツァルトのピアノ・ソナタを弦楽四重奏のために編曲する計画を提示し(1 月 24 日)、それに対してベートーヴェンはこう返答します。

「モーツァルトのソナタを四重奏に編曲するのはあなたの面目になるでしょうし、きっと採算も取れることでしょう。私自身そのような機会があれば喜んでもっと協力したかったところです。しかし私はだらしない人間で、どんなに努めても全て忘れてしまいます。ですが、それについてあちこちで話したところ、どこでも大賛成の感触を得ました。もし貴兄[Herr Bruder]が七重奏曲をそのまま出版されるばかりでなく、フルートのために例えば四重奏としても編曲されるならば、たいへん結構なのですが、そうすればフルート愛好家たち 実際は彼らからもう請われているのですが にとって有用でしょうし、彼らは虫が群がるように殺到して味わうことでしょう」(1801 年 4 月 22 日)。

これらの編曲はこのときはどれも実現しませんでした。翌 1802 年の6月か7月に作品 20 の原曲の初版が出された後、早くも8月には弦楽五重奏への編曲版が出版されています。これはおそらくホフマイスターによる編曲です。ところが、ベートーヴェンは秋になって、複数の新聞と音楽雑誌に次のような抗議文を投稿します。

「お知らせ。/私は以下の件を公に告知することが、世間並びに私自身に対して義務であると考えます。二つの五重奏曲、すなわちウィーンのモッロ氏から出版された八長調（私の交響曲 [第1番]からの編曲)と、ライプツィヒのホフマイスター氏から出版された変ホ長調(私のおなじみの七重奏曲 作品20 からの編曲)は、いずれもオリジナルの五重奏曲ではなく編曲にすぎないこと、編曲は出版業者氏によるものであること。そもそも編曲というものに対しては昨今(編曲が盛んな私たちの時代にあっては)、作曲者が抵抗してもせんのないことです。しかし少なくとも、編曲である旨をタイトル・ページに告知するよう出版業者に要請し、それによって作曲者の名誉が汚されず、世間が欺かれないようにすることは、作曲者に与えられた権利でありましょう。以上、今後とも同様のことが起きないようにするために。同時に、私の作曲になる新しいオリジナルの五重奏曲 八長調 作品 29 がまもなくブライトコプフ・ウント・ヘルテルから出版されることをお知らせします。」(『ヴィーン新聞』1802年10月30日号;『総合音楽新聞』1802年11月3日号、「情報欄」11月号、No.IV, 15)

これだけを読むと、ベートーヴェンが編曲というものに対して不信感をもっていたように受け取られるかもしれませんが(似たような発言はほかにも数例あります)。しかし、そもそも編曲を提案したのはベートーヴェンの方でした。この投稿の場合、どうやら作曲者に無断で出版されたこと、しかも印刷譜には編曲作品である旨と編曲者名が明記されていなかったことが、抗議の理由だったようです。その他の発言例でも、前後の事情をよくふまえて読むと、むしろ編曲推進派としてのベートーヴェンが浮かび上がってきます。彼にとって重要なのは、編曲者が誰であるかということへのこだわりでした。時間的余裕があれば自分の編曲がいちばんですが、他人による編曲はたとえ気が進まなくとも、そのこと自体に反対していたわけではありません。編曲者の能力と、どのように編曲したか、それを自分がどれだけコントロールできるかこそが問題でした。

出版業者との交渉から窺えるのは、一般にベートーヴェンは初期の接触ではかなり低姿勢を装い、すぐに提供できる作品もまだ計画中の作品も、とにかく多めに列挙して、いろいろな可能性を探るという傾向です。「作品のいっそうの普及と収益のために」、編曲もいろいろと提案しています。商売人としてのしたたかさも相当なものです。

## 編曲のオリジナリティー

ところで、ベートーヴェン関係の編曲は次のように分類することができます。自作の編曲、他人の作品の編曲(研究用)、自作の他人による編曲の監修、他人による編曲で彼が承認したもの、他人による編曲で彼がいっさい関わっていないもの、彼が編曲を提案したが実現されなかったもの。

ベートーヴェンの創作活動という観点から特に重要なのは と です。ベートーヴェン自身が関わった編曲は、単なるトランスクリプション(楽器の移し換え)の域を超えて、新たな創

作に近い創造性を孕んでいることが多く、「正規」の作品とはまた別の角度から、彼の作曲手法や様式を垣間見ることができるからです(代表例は、ヴァイオリン協奏曲 ピアノ協奏曲、管楽八重奏曲作品 103 弦楽五重奏曲作品4、ピアノ・ソナタ第9番作品 14/1 弦楽四重奏曲 Hess 34 など)。の他人による編曲の監修であっても、けっしておざなりなものではなく、かなり本格的な見直しが行われていることがあるので、自分で行った編曲に匹敵する重要性をもっています(代表例は弦楽五重奏曲作品 104 で、これはピアノ三重奏曲作品 1/3 のヨーゼフ・カウフマンによる編曲を大幅に手直したもの)。や は作曲者が直接関与していないものですが、当時や後の時代において、人々がベートーヴェン作品をどのような姿で演奏し聴いていたのかを知るためには、やはり大事な手がかりとなります。

編曲の多くはピアノや室内楽へのものですが、演奏媒体の変更のうち最もやっかいなのが鍵盤楽器と弦楽器の間の場合です。音域や楽器の特性がかなり異なるためです。ピアノ・ソナタ 作品 14/1(ホ長調) 弦楽四重奏曲 Hess 34 (ヘ長調)は、その問題解決の好例と言えるでしょう。弦楽器の音域や音色を活かすための移調、原曲にない対位旋律の追加、伴奏声部におけるリズムの活性化、強弱法の思い切った変更などを通して、いっそう形式感のある円熟した様式に変貌させているのです。原曲を知らない人が聴いたら、オリジナル作品と思うに違いありません。最初の弦楽四重奏曲集である作品 18 を書き上げた後での、次の弦楽四重奏曲への挑戦の試みとしても位置付けられるでしょう。音楽研究所の主催で9月30日に催される「お話と演奏:ベートーヴェンの編曲作品」では、この編曲を含む数曲が紹介されます。いずれも図書館所蔵の最初期の楽譜に基づいた演奏です(下記資料2を参照)。

近年、オリジナルの作品ばかりでなく、編曲の演奏や録音が増えてきています。珍しいものならなんでも発掘してしまえという風潮に、話題作りに必死のコンサート・マネージメントや録音会社の商業主義的な思惑を感じ取って、眉を顰める向きもあるでしょう。しかし、コンサートの歴史を見ると、クラシック・コンサートの聖域化が進んでも、比較的最近まで編曲ものはごくふつうの演目でした。それにレパートリーの拡大を目指す演奏家にとって、この分野は無尽蔵の宝庫でもあります。よくできた編曲は新鮮で面白い。ベートーヴェン自身による最良の編曲では、オリジナル作品にも匹敵する創意が発揮されています。原曲至上主義に捉われてこれらの宝の山を無視するのは、いかにももったいないというものです。

## 資料

### 1) ベートーヴェンによる自作品の編曲

( )内は生前出版年。「同時」は原曲と同時出版

#### 室内楽への編曲

管楽八重奏曲 作品 103	弦楽五重奏曲 作品4(1796)
弦楽三重奏曲 作品 3(1796)	ピアノ三重奏曲 Hess 47(未完)
ピアノ五重奏曲[Pf, Ob, Cl, Hr, Fg]作品 16(1801)	ピアノ四重奏曲[Pf, Vn, Va, Vc]作品 16(1801: 同時)
ピアノ三重奏曲[Pf, Cl, Vc]作品 11(1798)	ピアノ三重奏曲[Pf, Vn, Vc]作品 11(1798: 同時)
ピアノ・ソナタ 作品 14-1(1799)	弦楽四重奏曲 Hess 34(1802)

ホルン・ソナタ 作品 17(1801)	チェロ・ソナタ 作品 17(1801: 同時)
七重奏曲[管弦]作品 20(1802)	ピアノ三重奏曲[Pf, Cl, Vc]作品 38(1805) ピアノ三重奏曲[Pf, Vn, Vc]作品 38(1805: 2編曲同時)
交響曲第2番 作品 36(1804)	ピアノ三重奏曲 作品 36(1806)
6つの民謡主題と変奏曲[Pf, Fl]作品 105(1819)	6つの民謡主題と変奏曲[Pf, Vn]作品 105(1819: 同時)
10の民謡主題と変奏曲[Pf, Fl]作品 107(1820)	10の民謡主題と変奏曲[Pf, Vn]作品 107(1820: 同時)

### ピアノ編曲

メヌエット[弦楽四重奏]Hess 33	?	Hess 88
(騎士パレエ) WoO 1		Hess 89
12のメヌエット WoO 7		Hess 101(1795)
12のドイツ舞曲 WoO 8		Hess 100(1795)
6つのメヌエット WoO 10(消失)		WoO 10(1796)
7つのレントラー WoO 11/Hess 27(消失)		WoO 11/Hess 27(1799)
12のドイツ舞曲 WoO 13/Hess 5(消失)		WoO 13/Hess 5
12のコントルダンス WoO 14/Hess 102(1802)		WoO 14/Hess 102(1802)
行進曲[管楽六重奏]WoO 29	?	Hess 87
ピアノ協奏曲第3番 作品 37(1804)フィナーレ		「小コンツェルト・フィナーレ」Hess 65(1821)
(プロメテウスの創造物) 作品 43(序曲 1804)		Hess 90(1801)
(ウェリントンの勝利) 作品 91(1816)		Hess 97(1816: 同時)
交響曲第7番 作品 92(1816)第1楽章		[第46小節まで]Hess 96
(ボヘミア守備隊行進曲) 第1番 WoO 18(1818-19)		Hess 99
弦楽四重奏曲(大フーガ) 作品 133(1827 没後)		[4手連弾] 作品 134/Hess 86(1827:同時)

### ピアノ・ヴォーカル・スコア、ピアノ伴奏

(エグモント) 作品 84(1810, 12) 第4曲		Hess 93 他
(奉献歌) 作品 121b(1825)		Hess 91(1825: 同時)
(盟友歌) 作品 122(1825)		Hess 92(1825: 同時)

### 管弦楽への編曲

ピアノ・ソナタ 作品 26(1802)III. 葬送行進曲	(レオノーレ・プロハスカ) WoO 96-4(葬送行進曲)
(ウェリントンの勝利) [パンハルモニコン用] Hess 108	作品 91 第2部(1816)

### その他

ヴァイオリン協奏曲 作品 61(1808)	ピアノ協奏曲 作品 61(1808: 同時期)
(奉献歌) Hess 145/WoO 126(1808)	[三重唱/合唱/器楽; 独唱/合唱/器楽] 作品 121b(1825)
行進曲[管楽六重奏]WoO 29/ Hess 87	音楽時計用 Hess 107(1812~19)

(アテネの廃墟) 作品 113(序曲 1823)	(献堂式)Hess 118: 作品 124(1825), WoO 98, 作品 114 (1826)を含む
--------------------------	---

## 2) 他人の作品の編曲 ( )内は編曲年

ヘンデル(ソロモン) 序曲のフーガ部	弦楽四重奏 Hess 36(1798 頃)
J.S.バッハ(平均律) 第1巻 変ロ短調フーガ	弦楽五重奏 Hess 38(1801-02)
J.S.バッハ(平均律) 第1巻 ロ短調フーガ	弦楽四重奏 Hess 35(断章)(1817)
モーツァルトの2クラヴィーアのためのフーガ K 426	筆写しながら総譜化 Hess 37(不明)

## 3) 他人の編曲の監修(主な例) ( )内は生前出版年

ピアノ三重奏曲 作品 1-3(1795)	弦楽五重奏曲 作品 104(1819)【カウフマン編】
セレナーデ[弦楽三重奏]作品 8(1797)	ノットゥルノ[Pf, Va]作品 42/Hess A 13(1804)【クラインハインツ編】
セレナーデ[Fl, Vn, Va]作品 25(1802)	セレナーデ[Pf, Fl/Vn]作品 41/Hess A 12(1803)【クラインハインツ編】
ピアノ協奏曲 第4番 作品 58(1808)	ピアノ六重奏曲? [Pf, 2Vn, 2Va, Vc](手稿譜: 1807 年初夏までに成立) [Pf パートは作曲者改訂、弦パートはベッシーガー編]
(フィデーリオ) 作品 72	ピアノ・ヴォーカル・スコアと歌詞なしのピアノ・スコア(1814)【モシェレス編】
(ウェリントンの勝利) 作品 91(1816)	トルコ軍楽(1816: 同時)【ディアベリ編】
交響曲第8番 作品 93(1817)	2手ピアノ(1817: 同時)【ハースリンガー編、チェルニ-とベートーヴェンにより修正】

## 疑義のある編曲(例)

弦楽五重奏曲 作品 4(1795)	ピアノ三重奏曲 作品 63/Hess A 14(1806)【クラインハインツ編?】
弦楽三重奏曲 作品 3(1796)	チェロ・ソナタ 作品 64/Hess A 15(1807)
七重奏曲[管弦]作品 20(1802)	管楽十一重奏曲 Hess 21(断片)
ヴァイオリン・ソナタ 作品 30-3(1803)	五重奏曲[Fl, Vn, 2Va, Vc]Hess A 8(1811)
ピアノのための(アンダンテ・ファヴォリ) WoO 57(1805)	ロンドー[弦楽四重奏]Hess A 10(1806 頃)【リース編? ホフマイスター編?】
三重奏曲[2Ob, Ehr]作品 87(1806)	弦楽三重奏曲[2Vn, va]作品 87(1806: 同時)【作曲者承認】

## 資料2 演奏会のための資料

\* 下線は国立音楽大学図書館所蔵、PN はプレート番号、B & H は Breitkopf und Härtel は当日演奏される編曲と使用エディション

### 交響曲 第2番 二長調 作品36

#### 原曲

成立・1801-02

初演・1803, 4/5, アン・デア・ヴィーン劇場, ベートーヴェンのアカデミー



初版・1804, 3, Wien: Bureau d'Arts et d'Industrie, PN 305

献呈・リヒノフスキ侯爵

編曲

編成	エディションと手稿譜
九重奏 (2Vn, Va, Vc, Kb, 2Ob, 2Hr)	1809, C. F. Ebers編, Offenbach: André, PN 2677
七重奏 (2Vn, Fl, 2Va, Vc, Kb)	1807, G. Masi 編, London: Monzani & Co.; 改題版 c1820, London: Monzani & Hill
弦楽五重奏 (2Vn, 2Va, Vc; Fl, 2Hr, Kb ad lib.)	1807, 7, F. Ries編, Bonn: Simrock, PN 519; 増刷
弦楽四重奏	1828, C. Zulehner 編, Bonn: Simrock, PN 2684
ピアノ四重奏 (Pf, Fl, Vn, Vc)	1826, J. N. Hummel編, Mainz: Schott, PN 2414
	1828, 同, Paris: Schott, Schlesinger
	1826, London: Chappell
ピアノ四重奏 (Pf4手, Vn, Vc)	1862, Carl Burchard編, Leipzig: B & H, PN 10404
ピアノ三重奏 (Pf, Vn, Vc)	1805 編曲, 1806, 5 出版, ベートーヴェン編, Wien: Bureau d'Arts et d'Industrie, PN 503
	改題版 1815-, Wien: Magazin de J. Riedl, PN 503
	1826-, Wien: T. Haslinger
	後続版 1815, Bonn: Simrock, PN 1195
	? Paris: Carli. Chanel
	c1832/33, Frankfurt: Dunst, PN 304 [ピアノ・パートは総譜]
2台ピアノ	c1810, A. Diabelli 編, Wien: Magazin de l'imprimerie chimique (S. A. Steiner, PN 1000)
	改題版 1826-, Wien: Haslinger
4手ピアノ	1816, 6, F. Mockwitz編, Leipzig: B & H, PN 2411;
	再版 2/1821, PN 3635, 3/1826, PN 4199, 4/1836, 増刷 1837-
	1827, C. Czerny編, Leipzig: Probst, PN 353; Wien: Tobias Haslinger
	新版 1836- Leipzig: Fr. Kistner; 改題版
	1823?, W. Watts 編, London: Chappell & Clementi
	1870-, W. Watts, Paris: G. Flaxland-Durand-Schonenwergen et Cie.
	Successesurs, PN G. F. 700
	c1835, J. B. André 編, Offenbach: Johann André, PN 6122
	? Paris: Richault, PN 2965
2手ピアノ	1826, J. N. Hummel編, Mainz: Schott, PN 2413
	1865, F. リスト編, Leipzig: B & H [リストの新旧全集に所収]
フィスハルモニカとピアノ	第2楽章, Georg Lickl 編 (手稿)

ピアノ・ソナタ 第8番 八短調 《悲愴》 作品13

成立・1797-98

初版・1799 秋, Wien: Hoffmeister, PN 128; 1799, 12 増刷

献呈・リヒノフスキ侯爵

編曲	
編成	エディション
管楽九重奏 (2Ob, 2Cl, 2Hr, 2Fg, Kfg)	Wien: Chemische Druckerei (Inhaber: S. A. Steiner)
	改題版 1826-, Wien: Haslinger
弦楽五重奏	1805, F. A. Hoffmeister編, Wien: Hoffmeister, PN 340
	改題版 1831-, Magasin de l'imprimerie chimique, 1831-, Tobias Haslinger, PN 340
弦楽四重奏	1838, v. Blumenthal 編, Wien: P. Mechetti
4手ピアノ	1826, Fr. Mockwitz 編, Hamburg: Böhme

### ピアノ・ソナタ 第9番 ホ長調 作品14-1

成立・1798-99

初版・1799, Wien: T. Mollo & Comp, PN 125

献呈・ブラウン男爵夫人ヨゼフィーネ

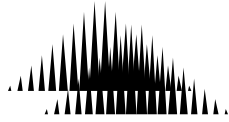
#### 編曲

編成	エディション
小オケ	第2楽章, 1828, Frankfurt: Hoffmann & Dunst, PN 56
弦楽四重奏	下記 Hess 34 参照
4手ピアノ	1837, Hamburg; Cranz
2手ピアノ	第2楽章 Neuer Walzer, c1830, Göttingen: J. G. H. Hübner, PN **

### 弦楽四重奏曲 ヘ長調 Hess 34 (ベートーヴェン自身による編曲)

成立・1801-02(?) (1802, 7/13, B&H 宛書簡)

	エディション
初版	1802, 5(?), Wien: Bureau d'Arts et d'Industrie, PN 17 [ベートーヴェン作品で同社初出版]; 増刷 献呈・ブラウン男爵夫人ヨゼフィーネ
改題版	1815, Wien: Riedl; 後の所有者: Steiner & Co. 1822, T. Haslinger, 1826
後続版	1802, Bonn: N. Simrock, PN 242 (フランスでも販売)
	新版 1875, ノッテボーム校訂, Berlin: N. Simrock, PN 7547
	1807?, London: Clementi & Co.
	1810?, London: Clementi, Banger, Hyde, Collard & Davies
	1905, W. Altmann 校訂, Leipzig: B&H
総譜	1905, フィナーレの総譜とオリジナルのピアノ譜, W. Altmann校訂 (雑誌 Die Musik, 5/4 の付録として, PN **)
	全曲 1911, W. Altmann 序文, Leipzig: E. Eulenburg, PN 3318
	全集版 1962, P.Mies 校訂, 新全集 VI/3 付録 1963, W.Hess 校訂, 旧全集への補遺 VI/13
備考	もともと弦楽器用という説 Michael E. Broyles 1970 トリオ: WoO 43a のトリオ参照



## ベートーヴェンの民謡編曲

藤本 一子

明治期の日本には、数多くのイギリス民謡が導入されました。明治14年に卒業式歌として文部省唱歌に導入された〈蛍の光〉はよく知られていますが、そのほかにも〈庭の千草〉や〈アニー・ローリー〉など、数々のイギリス民謡が明治 大正期の日本の音風景に重要な役割をはたしています。じつはこれらの旋律のいくつかは、ほかならないベートーヴェンによってピアノ三重奏の伴奏がつけられているのです。

今月の図書館展示では、ベートーヴェン作品が当時、どのように編曲されて楽しまれていたか、そのあり様と意味を探ろうというものです。その点からすれば、ベートーヴェンによる「民謡編曲」は、少しわき道に入りますが、“編曲”の意味や面白さを考えるという面においては通じるところがあるでしょう。普段はあまり注目されることのないベートーヴェンの「民謡編曲」。この機会に光をあててみましょう。

### 18世紀末 19世紀ヨーロッパの「民謡」熱

18世紀のヨーロッパでは民族的なものへの関心が高まっていました。自らの民族が伝承してきた遺産、そして異民族の文化への憧れも大きくなっていきました。これらを集約するものが「民謡」でした。ダールハウスという研究者によれば、「民謡」のはたした役割は二つの段階にわけて考えられます。まず18世紀には啓蒙主義的・ヒューマニスティックな理念である「高貴な単純性」を代表するものとして、そして19世紀には逆に、合理主義への反動ともいえるべき遙かな時代への「憧れ」や「郷愁」を内包するものとして、それぞれの時代の文化的な意味を担っていたと捉えられるとされます。民謡の性質をよく言い当てた見方だと思われます。

ところで、イギリスでは民謡に対して、特に深い思い入れがあったようです。その背景には、イングランドによるスコットランド、アイルランド、ウェールズへの政治的・宗教的な抑圧の歴史がありました。各民族が、それぞれのアイデンティティを民謡に求め、その熱い思いが「民謡集」を出版させていったのです。

19世紀はじめにヨーロッパで起こった「オシアン」ブームは、面白い形で“民謡熱”を示しています。3世紀に存在したフィンガル王の衰亡を、その子オシアンが歌ったという哀歌。スコットランドのハイランド地方に伝わるゲール語で書かれたそのバラードを、スコットランドの詩人ジェームズ・マクファーソンが翻訳したというふれこみで1765年に出版されたのが、「オシアン古謡」です。この詩集は、またたくまにヨーロッパを魅了しました。文豪ゲーテも作品中に登場させ（小説「若きウェルテルの悩み」1774年）、ナポレオンお抱えの画家ジロデも（1801年）、アングルも（1813年）題材にとりあげ、さらにオペラの主題にもなりました（クンツェン〈オシアンのハーブ〉1799年、パスピィ〈コマラ〉1800年ほか）。シューベルトの歌曲〈オシアンのナトス戦死のあとの歌〉D278なども、よく知られています。これほどに人々の熱をあおった「オシアン古謡」でしたが、1895年になってマクファーソンによる完全なフィクションであることが判明しました。ここで注目しておきたいことは、この「古謡」はおそらくオリジナル風でありながら、近代的な感覚で色付けされていたのではないかと、そしてそれだからこそ、当時の人々を魅了したのではないかと、と思われることです。

## 「民謡編曲」の背景

「オシアン古謡」は詩ですが、こういった傾向は音楽の「民謡」にもあてはまります少し時代をさかのぼりましょう。

18世紀のイギリスにおいて、自国の民謡旋律に、著名な作曲家による伴奏をつけて出版する動きが現れました。この運動はウィリアム・ネビア(1740年頃生まれ)らによって先鞭がつけられ、出版者ジョージ・トムソン(Gorge Thomson 1757-1851)の手で活発に展開されます。熱烈な民謡愛好家だったトムソンは、自ら民謡旋律を収集しますが、すぐれたイタリア人歌手による民謡コンサートを聴いて感動した体験から、「民謡は芸術的な音楽とすぐれた詩によってはじめて真価を発揮する」という美学を持つにいたりました。こうして民謡の旋律をプレイエル、コジェルフ、ハイドン、ベートーヴェン、ヴェーバーらに送り、芸術的な格調高い伴奏をつけるように依頼します。その一方で、ウォルター・スコットやロバート・バーンズら同時代の人気詩人に新作の民謡詩を注文します。古来の民謡にみられる卑猥な歌詞を19世紀風の上品なものに変更させたりも、しました。こうしてトムソンは、最終的に伴奏づけされた民謡と新作の詩を合体させ、「新しい民謡」を創出したのでした。

## ハイドンの民謡編曲

ベートーヴェンにすすむ前に、ヨーゼフ・ハイドン(Josef Haydn 1732-1809)に触れておきましょう。ハイドンはスコットランドのヴァイオリン奏者ウィリアム・ネビアと親交がありました。ネビアは1790年に伴奏付きのスコットランド歌集を出版したものの(Selection of the most favorite Scots Songs, chiefly Pastoral)、経済的に苦境に陥りました。このとき彼の窮状を救ったのが、ロンドンに滞在していたハイドンでした。ハイドンは100曲のスコットランド民謡に伴奏をつけて、彼を支援したと伝えられています。ハイドンはその後も、ウィリアム・ホワイト、ジョージ・トムソンら出版者からの依頼に応じて、ほぼ350曲の民謡編曲を残すことになります。

## ベートーヴェンの民謡編曲

ところで、もはやハイドンからの編曲が見込めなくなった頃、ジョージ・トムソンは次なる人気作曲家としてベートーヴェンに照準を定めました。1809年、トムソンはベートーヴェンに、イギリス民謡に芸術的な伴奏をつける仕事を依頼します。ベートーヴェンは、ハイドンと少なくとも同額の報酬を条件に、この依頼を受諾。以後1820年まで11年間にわたって民謡編曲を書き続けます。これまでの研究では総数179曲が数えられていますが、資料状況がきわめて錯綜していますから、今後、この数は訂正されるかも知れません。179曲の中には、ハイドンが手がけたものと同じ民謡旋律も5曲みとめられます。

ベートーヴェンの民謡編曲は1810-13年に最も多く書かれ、93曲に及びます。この時期は創作が滞りがちでしたが、その一方で、パトロンたちから約束されている年金額はインフレによって実質的に目減りし、経済的な不安がつのっていました。おそらくベートーヴェンは、「民謡編曲」の仕事でこうした不安をしのいでいたのでしょう。

トムソンから送られてくるイギリス民謡旋律には、当初歌詞がつけられていませんでしたが、ベートーヴェンの要請で、1813年から歌詞要約がつけられます。ベートーヴェンはそこにピアノ、ヴァイオリン、チェロ(時にフルートも)の伴奏をつけ、同じものを3セットほど筆写させて、別々のルートでイギリスに送りました。

## 《夏の名残のバラ》

それでは、トムソンが送った旋律がどういう性格のものであったか、例をあげておきましょう。(夏の名残のバラ The last Rose of Summer)として知られている旋律です。この旋律はアイルランドだけで7つのタイトルがつけられ、スコットランドでも(花咲く野に横たわり)のタイトルで知られていたようです。早いものは16世紀にさかのぼるようですが、記譜されたのは1726年(丘の上のネッド)。これが変容するのがトマス・ムーアによる『アイルランドの旋律集』(1813年)第5番です。トムソンはこれに近い2種類の旋律をベートーヴェンに送り、ベートーヴェン2曲それぞれに伴奏をつけています。ちなみに、のちにメンデルスゾーンが(スコットランド幻想曲)で用いた旋律も、これに類似しています。

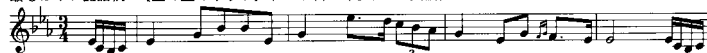
さて、ベートーヴェンは2つの旋律に編曲しましたが、トムソンは1曲にバイロンの詩(「あなたの残した口づけは」WoO153-9)、別の1曲にスミスの詩(「悲しく不幸な季節」WoO153-6)をつけています。ベートーヴェンは後者の旋律をもとに器楽の変奏曲も作曲していますから、この民謡旋律は当時すでによく知られていたのかも知れません(Op.105-4)。やがてこの旋律はフロートのオペラ(マルタ)(1847年)でヨーロッパ中に有名になり、日本にも導入されて

(庭の千草)と題されました。なお、同じ民謡旋律に類するものとして、ほかに、伴奏なしのゲール語のバラードも確認されているようです。こちらは17世紀アイルランドの領主エドモンド・オライア

ンに由来するともいわれ、トムソンはこれもベートーヴェンに送って編曲を依頼しました(「兵士の夢」WoO152-9)。

### 諸例 《夏の名残のバラ》の旋律

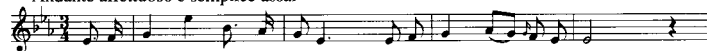
① 最も早い記譜例：《丘の上のネッド》(1726年) (もとはト長調)



② ベートーヴェン編曲：《あなたの残した口づけは》 WoO 153の9 (1813年)  
Andante amoroso e teneramente.



③ ベートーヴェン編曲：《悲しく不幸な季節》 WoO 153の6 (1815年)  
Andante affettuoso e semplice assai



## 音楽の特徴と経済収支

ベートーヴェンの「民謡編曲」について、音楽上の特徴を簡単に述べておきましょう。ほかの作曲家と比べてみると、たとえばハイドンは通奏低音による伴奏をつけて、いかにも簡素で調和のとれた編曲を行っていますが、ベートーヴェンは民謡旋律の根源的な特徴、すなわちヨーロッパの伝統的な調性の枠組みとは異なった旋律構造に即し、民族的な音調を表現しようとしています。トムソンもこれを歓迎したとみえて、ハイドンがつけた通奏低音伴奏の曲から5曲をベートーヴェンに依頼しなめています。研究者ダールハウスが述べた民謡の2つの段階に即していえば、ハイドンは啓蒙主義的・古典主義的な「単純性」の理念を、ベートーヴェンは19世紀的な民族主義的「憧れ」や「郷愁」をあらわしているといえるでしょう。

経済収支についても触れておきます。ベートーヴェンはトムソンに送った179曲に対して、総額610ドゥカーテンを受け取りました。1曲について最初は3ドゥカーテン、のちに4ドゥカーテン。第1交響曲が20ドゥカーテン、最後のピアノ・ソナタ群が1曲30ドゥカーテン、弦楽四重奏曲 Op.127が50ドゥカーテンですから、民謡編曲は「仕事」として、なかなか意味があったと思われます。

「民謡編曲」の仕事は創作面においてもなんらかの影響があったに違いありませんが、その点に関してはこれから研究がなされることと思われます。

最後に資料のことを付け加えておきます。ベートーヴェンはイギリス在住のトムソンに宛てて「民謡編曲」の楽譜を郵送しましたが、当時はナポレオンの大陸封鎖のために南まわりで迂回せざるをえませんでした。船が難破することも考慮して、一回の送付につき複数セットの筆写譜が発送されたようです。このことから、同一でない複数ヴァージョン(異稿)が残されました。これらの資料研究はようやく端緒についたところで、1999年に最初の成果があらわれたばかりです：(スコットランドとウェールズの民謡編曲)(新ベートーヴェン全集 Petra Weber-Bockholdt 校訂 1999年 Henle, München)。ここには Op.108、WoO156、WoO155が収載されています。Op.108は25曲すべてについて2段階の楽譜が掲載され、WoO156では3重唱曲に関してフルートが付されています。これまで旧ベートーヴェン全集でしか伝えられてこなかった「民謡編曲歌曲」に、やっと新しい楽譜が与えられることになったのです。

今回のベートーヴェン研究部門主催の講座(9月30日)では、(素敵な若者ジェイミー) Op.108-5、(悲しく不幸な季節)(庭の千草) WoO153-6、(過ぎ去りしなつかしき日々)(蛍の光) WoO156-11、(ゴッド・セイヴ・ザ・キング) WoO157-1が演奏されますが、このうちマークの曲は新全集が用いられます。

### 主な参考文献

- Herders Werke. Erster Teil. Zweiter Abteilung Stimme der Völker. Volkslied nebst untermischen andern Stuecken. Hrsg. von Dr. Heinrich Meyer. Stuttgart
- Carl Dahlhaus; Die Musik des 19. Jahrhunderts. Die Idee des Volkslieds. S.87-92, 1980 Wiesbaden
- Barry Cooper; Beethovens Folksong Settings. Chronology, Sources, Style. 1994 Oxford
- Petra Weber-Bockholdt; Schottische und irische Volksmelodien in Beethovens Bearbeitung. Münchner Beethoven-Studien. 1992 München-Salzburg.
- Marianne Bröcker; Die Bearbeitungen schottischer und irische Volkslieder von Ludwig van Beethoven. Jahrbuch für musikalische volks- und Völkerkunde Band 10. 1982 Wiesbaden
- Paul Bekker; Beethovens „irische“ Symphonie. Allgemeine Musikzeitung 38, 1911, S.481f.

### ベートーヴェンの民謡編曲一覧

- Op.108 25のスコットランド歌曲集(25曲)
- WoO152 25のアイランド歌曲集(25曲)
- WoO153 20のアイランド歌曲集(20曲)
- WoO154 アイランド歌曲集(12曲)
- WoO155 26のウェールズ歌曲集(26曲)
- WoO156 12のスコットランド歌曲集(12曲)
- WoO157 イギリス、スコットランド、アイランド、イタリアの歌曲集(12曲)
- WoO158 :23の諸国民謡(23曲) :7つのイギリス民謡(7曲)  
:6つのさまざまな民謡(6曲)
- Hess 133 可愛い子猫
- Hess 134 山の上の少年
- Hess 168 (題なし)フランスの旋律

Hess 192 グレンコーの虐殺に 第2作  
 Hess 194 私は夢をみた、花咲く野に横たわり 第1作  
 Hess 195 故郷を遠く離れて 第2作  
 Hess 196 昔の歌で聖なる方を称えます 第1作  
 Hess 197 むなしく、栄えるものはなく 第1作  
 Hess 198 ああ、あの素敵なベニヒワだったなら 第1作  
 Hess 168 誠実なジョニー 第1作  
 Hess 168 クロウタドリに寄せて 第1作  
 Hess 200 アイラの娘 (Op.108-4 の異稿)  
 Hess 202 ああ、あなたこそ私の (Op.108-11 の異稿)  
 Hess 205 夢 (WoO155-14 の別コーダ)  
 ほかに番号なしの歌6曲

ジョージ・トムスンが出版したベートーヴェンの民謡編曲

アイルランド・エアー集	(1814年)	WoO152, WoO153 (第1-4番)
アイルランド・エアー集	(1816年)	WoO153(第5-20番), WoO154(第1,第3-6,第8-12番) WoO157(第2,第6,第8,第11番)
ウェールズ・エアー集	(1817年)	WoO155
スコットランド・エアー集	(1818年)	Op.108
スコットランド旋律選集	(1822年)	WoO156(第1番),WoO157(第3番)
スコットランド旋律選集	(1825年)	WoO156(第2-4,第8-9,第12番),WoO157(第5番),WoO158(-第4番)
20のスコットランド旋律集	(1839年)	WoO156(第5-6番),WoO157(第1番)
スコットランド旋律集	(1842年)	WoO156(第7,第10-11番)

民謡編曲を主題にした器楽の変奏曲

6つの民謡主題と変奏曲 Op.105

ピアノ、あるいはピアノとフルート(またはヴァイオリン)1818年、1819年作曲

10の民謡主題と変奏曲 Op.107

ピアノ、あるいはピアノとフルート(またはヴァイオリン)1818年、1819年作曲



## ギター伴奏の歌曲について

藤本 一子

### ギターと歌

9月30日の講座「ベートーヴェンの編曲作品」では、ベートーヴェンの歌曲がギターの伴奏で歌われます。ベートーヴェンのギター伴奏歌曲のCDは、把握するかぎり一点しか確認されていませんから、非常に珍しい演奏の機会でしょう。しかも今回は永田平八氏によって、「19世紀ギター」で演奏されます。ぜひ沢山の方々にお聴きいただきたいと思います。

歌曲を撥弦楽器で伴奏することは、ごく自然なことでした。14 - 15世紀の吟遊詩人やミンネゼンガーは、自作の歌を、リラや小型のハープで即興的に伴奏しながら歌っていたことがわかっています。ルネッサンスの時代には、ギター伴奏歌曲も作曲されていますが、広く用いられていたのはリュートでした。やがて17世紀になるとバロック・ギターと呼ばれる楽器が各地で発展し、奏法もさまざまなものが現れます。「6弦ギター」は18世紀末に起こったようです。またたく間にヨーロッパ各地に広まり、ギター熱をひきおこしました。19世紀前半の家庭音楽を描いた絵画には、ギターを交えたアンサンブルのようすが、数多く伝えられています。持ち運び可能なこの楽器は、いつでもどこでも、音楽の団樂を作り出すことができ、何ととってもピアノに比べて安価でしたから、種々の音楽シーンで重要な役割を担っていました。

ギターが伴奏する音楽場面といえば、まず思い浮かぶのが、モーツァルト(1756-1791)のオペラ(フィガロの結婚)(1786年)第2幕です。少年とも青年ともつかないケルビーノが伯爵夫人の前でドキドキしながら歌うカンツォーナ 恋とはこんなものかしら。伴奏するのはスザンナのギターです。19世紀になると、シューベルト(1797 - 1828)の名前があげられます。シューベルトが友人たちと戸外で遊んでいる絵(クーベルヴィーザーによる)では、友人シュヴィントがヴァイオリンを弾き、オペラ歌手フォークルがギターを爪弾いています。ほとんど残すものがなかったシューベルトの遺品のひとつが、ギターだったこともよく知られています。シューベルトの歌曲のいくつかは、ギターで爪弾きながら作曲されたかも知れません。

ベートーヴェンの関連では、フォン・マルファッティ家の家庭音楽の油彩画(図参照)に、目をとめておきましょう。ピアノを弾いているのはピアノ曲(エリーゼのために)を捧げた相手とされるテレゼ・フォン・マルファッティ(1792-1851)。かたわらでギターを弾いているのは妹のアンナです。この時代にはほかにもギターを交えた奏楽の絵が数多く残されており、身分のある女性がたしなんでいたことがわかります。

### ベートーヴェンのギター伴奏歌曲

ところでベートーヴェンは100曲近い歌曲を作曲しましたが、じつはその中にギター伴奏を考慮して作曲したといわれる歌曲があります。(恋人に An die Geliebte) WoO140という曲で、3つの稿が残されています。ベートーヴェンの「不滅の恋人」であったとされているアントーニエ・ブレンターノ(1780-1869)に捧げられたとみられ、ギターを愛好するアントーニエのためにギター伴奏でも弾けるように書かれています。分散和音による簡素な伴奏は、ピアノではなくギターで伴奏されるとき、よりひそやかな響きと情調をかもし出すでしょう。



(恋人に)は特別ですが、それ以外にもベートーヴェン歌曲のかなりの数が、ギター伴奏に編曲されて出版されています。次の表は、ベートーヴェンの存命中に出版された作品を一覧にしたものです。(新全集「歌曲」巻を参照に作成。 マークは9月30日に演奏される曲。) 当時の人気曲だった〈アデライーデ〉は、9つもの出版社からそれぞれ別の編曲者によって出版されています。

さて、これらの歌曲は、どのような人々によって、どのような響きで演奏されたのでしょうか……。9月30日には「19世紀ギター」の伴奏で演奏されます。現代ギターの4分の1の、かすかな響きの19世紀ギター。この響きを聴きながら、当時の歌のシーンを想像すると、また音楽の世界が広がっていくようです。



フォン・マルファッティ家の奏楽  
「ベートーヴェン全集」第6巻



## ベートーヴェンのギター伴奏歌曲

作品番号	曲名	初版の出版年	初版の出版社	存命中に出版されたギター編曲伴奏による出版譜 (ベートーヴェン新全集「歌曲」巻校訂報告を参照)
Op. 46	アダライーデ Adelaide	1797年	ウィーン, アルタリア社	Wien, Artaria & Co. (1807, VN.1853); Bonn, Simrock (1802, VN.235); Offenbach, André (1807, VN.2447) Hamburg, Böhme; Hannover, Kruschwitz; Prag, Berra; Wien, Cappi & Diabelli; Berlin, Lischke
Op. 52	8つの歌曲 Acht Lieder	1805年	ウィーン, 美術工芸社	Nr.1: Mainz, Schott (um 1810, VN.431); Nr.3,5 und 7: Braunschweig, J.P.Spehr (1815, VN. 1112); Nr.6-8: Bonn, Simrock (1817, VN.1419)
Op. 75	6つの歌 Sechs Gesänge	1810年	ライプツィヒ, プライトコプフ & ヘルテル社	Nr.1: Berlin, Lischke (VN.1918); Braunschweig, Spehr (1815, VN.1112); Wien, Cappi & Diabelli; TA: Wien, Diabelli & Co.; Nr.2(2.Fassung, 1809): Berlin, Lischke; Braunschweig, Spehr; Hamburg, Böhme; Nr.4 u. 6: Braunschweig, Spehr (VN.1313); Nr.5 u. 6: Breslau, C. G. Förster; Braunschweig, Spehr (VN.1154)
Op. 83	ゲーテによる3つの歌 Drei Gesänge von Goethe	1811年	ライプツィヒ, プライトコプフ & ヘルテル社	Nr.1: Breslau, C. G. Förster; Nr.2: Wien, Cappi & Diabelli (um 1820, seit 1824: Diabelli & Co.)
Op. 88	人生の幸福 Lebensglück	1803年	ライプツィヒ, ホフマイスター社	Braunschweig, Spehr (VN.1312)
Op. 128	アリエット:キス Ariette (Der Kuß)	1825年	マインツ, ショット & ゼーネ社	B. Schott (Juni. 1825, VN.2327, als Op.121); Wien, Cappi & Co. (1825, VN.150, als 121.Werk)
WoO 117	自由な男 Der freie Mann, 2. Fassung	1808年	ボン, ジムロック社	Bonn, Simrock (1826, VN.2465)
WoO 123	君を愛す Ich liebe dich so wie du mich	1803年	ウィーン, トレーク社	Braunschweig, Spehr (1816, VN.1154)
WoO 124	嘆き La partenza	1803年	ウィーン, トレーク社	Braunschweig, Spehr (1815, VN.1112)
WoO 134	憧れ Sehnsucht, 4 Vertonungen	1808年 /1810年	ウィーン, ガイスティンガー社/ 美術工芸社	Braunschweig, Spehr (1816, VN.1154); Wien, Cappi & Diabelli (1821)
WoO 136	君を想う Andenken	1810年	ライプツィヒ, プライトコプフ & ヘルテル社	Braunschweig, Spehr (1816, VN.1154); Wien, Cappi & Diabelli (1821)
WoO 138	異郷の若者 Der Jüngling in der Fremde / Lied aus der Ferne	1810年	ウィーン, アルタリア社	Breslau, C. G. Förster; Eine Einzelausgabe: Wien, Mollo (1821)
WoO 139	恋する男 Der Liebende	1810年	ウィーン, アルタリア社	Breslau, C. G. Förster
WoO 140	恋人に寄せて第3稿 An die Geliebte, 3. Fassung	1814年	ウィーン, 雑誌 Eine Zeitschrift für Leben, Literatur und Kunst, Notenbeilage zum 12. Juli. 2S.	Bonn, Simrock (1817, VN.1419) ?
WoO 140	恋人に寄せて第1稿 An die Geliebte, 1. Fassung			Hamburg, Gonbart (1826) ?
WoO 143	兵士の別れ Des Kriegers Abschied	1815年	ウィーン, メケッティ社	Breslau, C. G. Förster; Eine Einzelausgabe: Hamburg, Böhme (ohne VN.)
WoO 145	秘密. 愛と真実 Das Geheimnis. Liebe und Wahrheit	1816年	ウィーン, 雑誌 Wiener=Mode=Zeitung und Zeitschrift für Kunst, schöne Literatur, und Theater	Bonn, Simrock (1817, VN.1419)
WoO 148	あれかこれか So oder so	1817年	ウィーン, 雑誌 Wiener=Mode=Zeitung und Zeitschrift für Kunst, schöne Literatur, und Theater	Bonn, Simrock (1817, VN.1419)



## 展示パネル紹介

加藤拓未

### 編曲楽譜の注文者

フランツ・ヨーゼフ・マックス・ロブコヴィツ侯爵(1772～1816)

F.ファイフナー彫版による銅版画。1799。オーストリア国立図書館所蔵。

ロブコヴィツ侯爵は、チェコに広大な所領を持つと同時にウィーンにも宮殿を構える芸術を愛好する名門貴族でした。自らチェロを嗜み、私財をなげうって、ウィーンの劇場文化の発展に大きな役割を果たしました。特にベートーヴェンの才能を高く評価し、1809年からは年金出資者の一人として大々的に援助するようになります。侯爵は、劇場経営にも手をのびしましたが、それには失敗し、最後は破産してしまいました。ベートーヴェンは、第3交響曲(英雄)、第5交響曲(運命)、第6交響曲(田園)などを侯爵に献呈しています。

近年の研究で、侯爵がベートーヴェンの(ピアノ協奏曲 第4番)作品58をベッシーンガーに依頼して、「弦楽五重奏」に編曲してもらっていたことが分かりました。侯爵は、しばしば自ら加わって弦楽アンサンブルを楽しんでいましたので、この作品58の弦楽五重奏版も、おそらくそのレパートリーの一部を占めたことでしょう。こうしたベートーヴェン作品の編曲楽譜の注文者は、現段階の研究でははっきりと特定できていませんが、おそらく侯爵の依頼によるものが、多かったのではないかと考えられています。

「ベートーヴェン 偉大な創造の生涯」H.G.ロビンズ・ランドン 新時代社 請求記号 C7-149

#### ウィーンのロブコヴィツ宮殿のエロイカの間

Rモーザー作

ロブコヴィツ侯爵は、ウィーンの自宅に貴族や音楽愛好家をまねき、半公開の性格をもつ音楽会を催していました。侯爵は、ベートーヴェンから第3交響曲(英雄)を献呈されますが、一般の公開初演(1805年4月7日)に先駆けて、1804年暮れに、まず自宅で非公式の初演を行なっています。このとき、ウィーンを訪れていたプロイセン皇太子ルイ・フェルディナンド公も臨席しましたが、皇太子を含め招待客一同は、(英雄)交響曲にたいへん感動し、1時間後にもう一度、演奏するよう要望したといわれています。また、侯爵自身も、活発に弦楽アンサンブルの演奏を、このウィーンの館で披露していました。

LUDWIG VAN BEETHOVEN IM HERZEN EUROPAS 請求記号 J92-511

#### チェコのロブコヴィツ宮殿

ロブコヴィツ侯爵家の財政は、1805年以降、悪化の一途をたどり、ベートーヴェンへの経済援助も1811年に中止されます。1814年には、劇場経営からの撤退を余儀なくされ、その後は、故郷のチェコに戻り、1816年に亡くなるまでそこにとどまりました。侯爵の音楽熱は、隠遁後も衰えず、このチェコの宮殿でもベートーヴェンの(英雄)交響曲のプライベート演奏会を開催しています。おそらく、このチェコの宮殿でも、侯爵による弦楽アンサンブル活動は、さかんに行なわれたことでしょう。

LUDWIG VAN BEETHOVEN IM HERZEN EUROPAS 請求記号 J92-511

ジョージ・トムソン(1757～1851)

水彩画 ウィリアム・ニコルソン作 1816

トムソンは、イギリス、スコットランド地方の大都市エディンバラの出版者でした。彼は音楽を愛好し、自らヴァイオリンも弾いたようです。そして、とりわけスコットランドを中心とする各地の民謡収集と、その出版に情熱を傾けました。トムソンは、民謡の普及を望み、家庭で演奏が楽しめるように、ピアノを含んだちょっとしたアンサンブルの形に編曲して出版を試みます。その編曲者には、ハイドンや、ブレイエル、ベートーヴェンといった著名な作曲家が選ばれました。ベートーヴェンは1809年に初めて、トムソンから民謡編曲の仕事の依頼を受け、1820年までに約180曲の民謡の編曲をこなしています。

BEETHOVEN BRIEF 2 請求記号 J83-924

---

## 編曲者

カール・チェルニー(1791～1857)

銅版画 B.ヘーフェル作

チェルニーは、ベートーヴェンの弟子で、後世に広く名を知られる唯一の作曲家、そしてピアニストです。チェルニーが作曲したピアノ教則本は、今日でもなお、学習者の必携テキストですが、これらはベートーヴェンのピアノ・ソナタを演奏するためのものでした。また、「若き日の思い出」と「ピアノ教程」(作品500)に含まれている「ベートーヴェン全ピアノ作品の正しい奏法」も、ベートーヴェンを理解するための貴重な情報を提供してくれます。ベートーヴェンは、チェルニーの編曲能力の高さを買っていました。ベートーヴェンの指示でチェルニーは、オペラ(フィデリオ)を「ピアノ用」に、そして、第8交響曲を「2台ピアノ用」に編曲しています。チェルニーは後に、ベートーヴェンの全交響曲を「2台ピアノ用」に編曲しており、それはベートーヴェンの没後、1827～29年に出版されました。

「ベートーヴェン全集」第9巻 講談社 請求記号 C64-256

フランツ・リスト(1811～86)

油絵 リヒャルト・ラウヒェルト作 1856

リストは、ハンガリー出身のピアニストで、作曲家です。彼は、ピアノをチェルニー(ベートーヴェンの弟子)に、作曲をサリエリに学びました。特にピアノの演奏に優れた才能を発揮し、「19世紀最大のピアニスト」とも呼ばれています。そして、その素晴らしい演奏技術を生かし、ベートーヴェンのピアノ作品の伝道者としても活躍しました。また、とりわけ重要なのは、リストがベートーヴェンの全交響曲を「ピアノ用」に編曲していることでしょう。この9つの編曲は、1865年にセットでブライトコプフ&ヘルテル社から出版されました。他にも、(七重奏曲)作品20や、(アデライーデ)作品46、(6つのゲレルトの歌曲)作品48なども編曲し、出版しています。

ERNST BURGER:FRANZ LISZT 請求記号 C48-089

フランツ・アントン・ホフマイスター(1754～1812)

ホフマイスターは、作曲家であると同時に、ウィーンの有名な楽譜出版業者でした。彼の経営する会社のうち、ライプツィヒ店がその後、今日知られているペーターズ社となります。ホ

フマイスター自身は 1806 年に出版業界から足を洗い、余生を作曲活動に捧げました。ベートーヴェンは、1799 年頃にホフマイスターと知り合い、1805 年まで、ホフマイスター社に数々の作品の出版をまかせています。1802 年、ホフマイスターはベートーヴェンに無断で、(七重奏曲) 作品 20 を「弦楽五重奏」に編曲し、出版しました。そのことで、ベートーヴェンは抗議の手紙を送りつけています。まがりなりにも著作権らしきものが確立されるのは、1830 年代に入ってからのことです。

BEETHOVEN BRIEFE 1 請求記号 J83-923

アントン・ディアベリ(1781～1858)

J. グリーフーパー作のリトグラフ。ウィーン楽友協会所蔵。

ディアベリは、1818 年に P. カッピと音楽出版社「カッピ&ディアベリ社」を設立しました。そして、1824 年からは単独経営者となって、ディアベリ社を立ち上げます。ベートーヴェンは、ディアベリを「ディアボルス(悪魔)氏」と皮肉って楽しんでいましたが、二人の友情は終生、変わりませんでした。ベートーヴェンの(ディアベリ変奏曲) 作品 120 の主題は、このディアベリによるものです。また、ディアベリは、ベートーヴェンの第 7 交響曲を「独奏ピアノ用」と「連弾用」に編曲し、1816 年に出版しています。

「ベートーヴェン 偉大な創造の生涯」H.G. ロビンズ・ランドン 新時代社 請求記号 C7-149

フェルディナント・リース(1784～1838)

ボン・ベートーヴェン = ハウス所蔵。

リースは、1801 年にボンからウィーンに出て、ベートーヴェンにピアノを師事しました。後に、彼は、ヴェーゲラーと共著で「ベートーヴェンに関する伝記的覚書」(1838 年、1845 年増補)を残していますが、この伝記は、ベートーヴェンに関する最初期のものとしてきわめて重要なものとされています。そして、リースは、師ベートーヴェンの許可のもと、(弦楽四重奏) 作品 18 を「ピアノ・トリオ」に、また、第 2 交響曲を「弦楽四重奏とコントラバス、フルート、2 つのホルン」用に編曲し、ジムロック社から出版しています。他にも、ベートーヴェンの(ヴァイオリン・ソナタ) 作品 30-2、(ピアノ・ソナタ) 作品 10-3、作品 28、作品 31-3 を「弦楽四重奏用」に編曲しています。

「ベートーヴェン全集」第 6 巻 講談社 請求記号 C63-520

フレデリック・カルクブレンナー(1785～1849)

ヴィニエロン作のリトグラフ

カルクブレンナーは、ドイツ系のフランス人ピアニストで、作曲家、音楽教育者でもありました。彼は、ハイドンの指導(1802～3 年)を受けた後、イギリスに渡り、ピアニストとしての地位を築きます。全盛期は、彼の 40 代で、当時すでにピアノ演奏の中心地、フランスのパリで第 1 人者として認められ、その名声はヨーロッパ全土に轟きました。レジオン・ドヌール勲章(1828 年)、プロイセン赤鷲勲章(1833 年)、ベルギーのレオポルド勲章(1836 年)など、数々の勲章や賞を受賞しています。カルクブレンナーは、若きショパンとも交流があり、彼に少なからぬ影響もあたえました。また、ベートーヴェンの第 9 交響曲を「ピアノ用」に編曲し、出版しています。

THE GROVE DICTIONARY OF MUSIC MUSICIANS 9 請求記号 X-004/GN/9

ヨハン・ネポムク・フンメル(1778～1837)

作者不明 油絵

フンメルは、ウィーンで活躍したピアニスト、および作曲家です。彼は幼少時代に短期間(1786～87年頃)ながら、モーツァルトのレッスンを受けています。ベートーヴェンとは、ウィーンで何度となく会う機会があったと思われませんが、はっきりと分かっているのは、1807年が最初です。エステルハージ家の依頼で(ミサ曲 八長調)作品 86 を作曲し、その上演のためにやって来たベートーヴェンは、当時のエステルハージ家の宮廷楽長フンメルと会いました。その後、フンメルは、シュトゥットガルトの宮廷楽長となりますが、1817年にベートーヴェンの(フィデリオ)を上演しています。また、ベートーヴェンの交響曲第 1～7 番を含む、いくつかの作品を「ピアノ四重奏」に編曲して出版するなど、ベートーヴェン作品の普及に一役買いました。フンメルは、ベートーヴェンの葬式にも駆けつけ、その棺を担いだと伝えられています。

『ベートーヴェン 偉大な創造の生涯』H.G.ロビンズ・ランドン 新時代社 請求記号 C7-149

---

## 演奏・場所

『美しきウィーンの名ネッテたちのためのセレナーデ』

ゲオルク・エマヌエル・オピツ作の色彩銅版画(1805年)。ウィーン楽友協会所蔵。

19世紀の初め頃まで、ローマ・カトリックの地域では、自分のクリスチャン・ネームの由来する「聖人の祝日」を、音楽などで盛大に祝う習慣がありました。例えば、7月26日の「聖アンナの日」の前夜は、「アンナ」「ニーナ」「アネッテ」「ナネッテ」といった名前をもつ女性たちの家の前に、音楽家が集い、セレナーデを演奏したのです。この版画は、ウィーンのトロツィー＝パレンフェルト邸の前で、通りに机を置き、八重奏を演奏している、その様子を描いています。建物の窓には、何人かの見物人が見えますが、おそらくそのうちの誰かが「ナネッテさん」なのでしょう。

『ベートーヴェン全集』第3巻 講談社 請求記号 C62-422

『ハイランドの踊り』

デヴィット・アランの原画に基づく版画。スコットランド・ナショナル・ギャラリー所蔵。

「ハイランド」は、イギリス、スコットランド北部の山岳地帯のことです。この絵は、ハイランド地方の若い男女が、踊りを楽しんでいる様子を描いています。ヴァイオリン、チェロの伴奏の他、その画面左奥の木陰に、バグパイプの奏者も見えます。ベートーヴェンは、この地方に伝わる民謡を数多く編曲しました。とくに2つの民謡(ハイランドのハリー)と(ハイランド人の嘆き)では、すぐれた編曲手法を示しています。

『ベートーヴェン全集』第6巻 講談社 請求記号 C63-520

ハルモニウムジーク

エッティンゲン＝ヴァラーシュタイン公の管楽合奏団の演奏シルエット(1791年)。

「ハルモニウムジーク」とは、1750～1830年頃、ヨーロッパ貴族の邸宅などで活躍した「管楽合奏団」のことです。彼らの主な役割は、貴族たちの夕食や社交パーティで、BGMを担

当することでした。時には、私的な、あるいは公的なコンサートのために演奏を披露することもありました。

1782年、オーストリア皇帝ヨーゼフ2世は8名の奏者からなる「ハルモニウムジーク」を結成させました。その編成は、オーボエ×2、クラリネット×2、ホルン×2、ファゴット×2で、以来、他の貴族たちの楽団もこの編成を真似るようになります(さらには、この皇帝の楽団を真似た、一般の人々による演奏楽団も出てきます)。ですが、地域や国、パトロンとなる貴族の予算に応じて、その編成の実態は様々でした。この絵では、左から、コントラバス×1、クラリネット×2、フルート×2、オーボエ×2、ホルン×2、ファゴット×1となっています。

モーツァルトの2つの〈セレナード〉(K.375とK.388/384a)のように、ハルモニウムジークのために書かれた作品もありますが、有名なオペラやバレエ音楽の一部を、この管楽合奏団用に編曲したのも数多くありました。通常、そうした編曲は、ハルモニウムジークの楽長が行いました。例えば、リヒテンシュタイン公のためにセドラクという楽長は、ベートーヴェンの許可を得て〈フィデーリオ〉をハルモニウムジーク用に編曲しています。

『人間と音楽の歴史』 <家庭音楽>と室内楽 音楽之友社 請求記号 C18-168

### 『歌 The Song』

ヘンリー・ウィリアム・バンブリーの原画に基づくフランチェスコ・バルトロツィ作の点描画(1782年)。コーブルク城所蔵(美術コレクション)。

この絵は、イギリスのとある貴族の邸宅で、4人女性が音楽を楽しむ風景を描いたものです。当時の貴族は、ちょっとした社交の場で、こうした歌や楽器の演奏を楽しみました。絵の中の左側の2人の女性は、1つの楽譜を一緒に見て歌っていて、右側の女性はそれを聴いているようです。画面中央の奥に立っている女性が持っている楽器は、おそらくリュートでしょう。

『人間と音楽の歴史』 <家庭音楽>と室内楽 音楽之友社 請求記号 C18-168

### 『クラヴィーア連弾』

ヨハン・アウグスト・ロスメスラー作の銅版画(1781年)。ドレスデン、ザクセン州立図書館所蔵。

この絵は、ドレスデンの宮廷楽長フランツ・ザイデルマンの作曲による〈クラヴィーア連弾のための6つのソナタ〉(1781年)の楽譜口絵として描かれたものです。2人がクラヴィーアを連弾していますが、第1奏者は女性(おそらく生徒)で、第2奏者が男性(おそらく教師)です。画面左側の、ステッキと帽子を手にした老年の男性は、女性の父親かもしれません。こうした連弾は、公開のコンサートで披露されることはめったにありませんでした。むしろ、普段の生活で、音楽を楽しむ時間に見られる光景といえるでしょう。

『人間と音楽の歴史』 <家庭音楽>と室内楽 音楽之友社 請求記号 C18-168

### 『宮中御用出版業者デッカー家での弦楽五重奏』

アントン・ヴァクスマンの素描に基づく模写(1798年)。カッセル、ペーレンライター絵画アルヒーフ所蔵。

18世紀後半以降、貴族のまねをして、一般市民家庭でも音楽を教養の1つとするようになります。一般的だったのは、弦楽器の3~5挺によるアンサンブルです。この絵では、麻雀テーブルのように4人の奏者で囲む「四重奏(唱)用の譜面立て」を中心に5人の男性が弦楽

五重奏を楽しんでいる様子を描いています。このテーブルは、譜面台を折りたたんで収納すれば、普段はちょっとしたコーヒーテーブルに変身するという「優れモノ」です。

『人間と音楽の歴史』 <家庭音楽>と室内楽 音楽之友社 請求記号 C18-168

### 『家庭音楽』

ヘンドリクス・ツルケン作(19世紀)。オーストリア国立図書館所蔵。

この絵は、ギターとピアノの2重奏の様子を描いたものです。この2つの楽器によるアンサンブルは今日あまり見かけませんが、19世紀ではいたって普通でした。描かれている部屋には、地図がかかっており、画面右側には書籍と本棚が見えます。この部屋は書斎でしょうか？髭の将校風の男性がギターを弾き、1人の女性がピアノを、もう1人の女性が譜めくりを担当しています。

『人間と音楽の歴史』 <家庭音楽>と室内楽 音楽之友社 請求記号 C18-168

## 展示楽譜紹介



### 長谷川由美子

(ピアノ・ソナタ ホ長調) 作品14 1

1802年以降 ウィーン 美術工芸社 請求記号 M2-243

ベートーヴェン自身による弦楽四重奏曲への編曲

(ピアノとフルートのための10の民謡主題と変奏曲) 作品107から第7曲

(コサック民謡による変奏曲)

1832年ころ フランクフルト・アム・マイン ドゥンスト社 請求記号 M2-407

イギリスの出版者ジョージ・トムソンの依頼によって作曲

(交響曲第3番) 作品55

1827年 ライプツィヒ プローブスト社 請求記号 M2-289

チェルニーによるピアノ連弾への編曲

(ピアノ・ソナタ 八短調) (悲愴) 作品13

1805年 ウィーン ホフマイスター社 請求記号 M2-243

ホフマイスターによる弦楽五重奏への編曲

(七重奏曲) 作品20

1802年 ウィーン ホフマイスター社 /

ライプツィヒ ホフマイスター・ウント・キューネル社 請求記号 M2-246

ホフマイスターによる弦楽五重奏への編曲

(交響曲第9番) 作品125

1865年 ライプツィヒ ブライトコップフ・ウント・ヘルテル社 請求記号 M6-533

フランツ・リストによる独奏ピアノへの編曲



(交響曲第 9 番) 作品 125

1853 年 マインツ ショット社 請求記号 M2-276  
フランツ・リストによる 2 台のピアノへの編曲

(交響曲第 9 番) 作品 125

1838 年ごろ マインツ ショット社 請求記号 M2-408  
カルクブレンナーによる独奏ピアノへの編曲

(交響曲第 7 番) 作品 92

1816 年 ウィーン シュタイナー社 請求記号 M2-270  
ディアベリによるピアノ連弾への編曲

(アンダンテ・ファヴォリ) Wo O57

1807 年から 15 年の間 ウィーン 化学印刷社 請求記号 M2-413  
リースによる弦楽四重奏曲への編曲

(交響曲第 5 番) 作品 67

1827 年 マインツ ショット社 請求記号 M2-257  
フンメルによるピアノ、フルート、ヴァイオリン、チェロの四重奏曲への編曲

(交響曲第 2 番) 作品 36

1809 年 オッフェンバッハ アンドレ社 請求記号 M2-250  
エーバースによる九重奏への編曲

(25 のスコットランド民謡) 作品 108 から第 9 曲

(いとしい人、森はなんと緑に)

1822 年 ベルリン シュレージンガー社 請求記号 M2-272  
イギリスの出版者ジョージ・トムソンの依頼によって作曲

(交響曲第 4 番) 作品 60

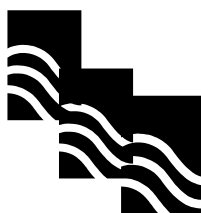
1809 年 ウィーン 美術工芸社 請求記号 M2-255  
弦楽五重奏への編曲 編曲者は不明

(ピアノ、クラリネット、チェロのための三重奏曲) (街の歌) 作品 11

1810 年か 11 年 ウィーン 美術工芸社 請求記号 M2-242  
弦楽五重奏への編曲 編曲者は不明

(ピアノ協奏曲第 4 番) 作品 58

ベートーヴェン研究者のキューテンによって、近年ピアノ協奏曲第 4 番の弦楽五重奏版として発表された編曲。弦楽五重奏への編曲はベッシーンガーによるもので、ピアノ・パートはベートーヴェンによってさまざまな改変がほどこされた。このバージョンへの編曲はベートーヴェンのパトロン之一、ロプコヴィッツ侯爵の依頼による。写真はベートーヴェンが弦楽五重奏版に加えた独奏パートの書き直し部分。  
請求記号 P5035 13(1) Beethoven Journal



図書館展示  
2004.9.6-10.1

ベートーヴェンの編曲作品

国立音楽大学附属図書館 広報委員会（染谷周子・高田涼子）  
2004.9.24/9.27